

留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その4）

Development of Japanese Teaching Materials According to the Needs
and Levels of International Students (4)

山口隆介・田中三千彦

Yamaguchi Ryusuke, Tanaka Michihiko

要 約

本稿は、本学留学生の実情に応じた日本語教材について第4回の報告である。2. では、教室で使われる語彙、表現の理解度調査を通じ、留学生が授業で必要とする語彙は一体どのような種類のものであり、何を決定要因とするのかについて、示唆を得たこと、および学習者を語彙、表現の理解度の違いが、語彙、表現のバランスの違いと対応しているという示唆について報告する。3. では、学習の当事者である学生自身が作成している日本語と中国語双方向に活用可能な教材の開発と、2010年度に起きた常用漢字追加の影響に関する報告である。1, 2, 4は山口が、3, は田中が担当した。

Key Words : 学生参加型、語彙の頻度の決定要因、教室日本語、授業中の表現、常用漢字追加

本文

1. はじめに

本学は留学生教育について10年にわたる経験を重ねてきたが、より充実した専門教育を施すには、その前提として、入学初期の日本語教育を強化することの必要性を痛感してきた。そこで、これまでの反省と留学生指導全般の経験を活かし、また、本学留学生の実態、すなわち留学生自身の実際のレベルに即し、同時に留学生が何を目的として日本語を学んでいるのかを反映した、すなわち、留学生自身のニーズに応じた日本語指導教材を開発することを目標に2007年度より独自の教材開発を続けてきた。

これまでの成果は、既に聖泉論叢15～17号において報告したが、本年度は、常用漢字が新たに追加されるなど、日本語をめぐる状況に変化が生じた。一方で本研究として、これまで3年間で調査のために実際の授業現場や配付物から採集した語彙、表現と、調査対象の絶対数が少ないために一般化が困難ではあるが、調査結果から得た示唆との蓄積により、学生が語彙、表現を学ぶという現象について、いまだ示唆的なものには留まるものの、理解の一定の方向付けが固まりつつある印象を抱いている。

そこで本年度は、2. にて、教室で実際に使われる語彙に関する学生の理解度の調査結果と、結果が示唆するところについての考察を報告する。次いで3. では2007年度より継続して行なっている、中国人の日本語学習者および日本人の中国語学習者を対象とした教材の開発と、それが前提としている日本語環境そのものの変化について報告する。

2. 教室で実際に使われる語彙に関する学生の理解度の調査

2010年12月17日、本学日本語研究会にて、出席のあった本学学生に調査紙を配布し、10名分回収した。その一部は本研究末尾に資料として付しておく。

調査内容は資料1にあるとおり、多く分けて2つで、その1つとして、コンピュータの授業で印象に残っている語があれば書くよう要請した。もう1つの調査は授業で実際に登場した語彙および表現に関するもので、2007年～2009年の本研究において、学生を対象に調査を行なった語彙と表現、総計433項目について、理解できる語彙および表現をチェックさせた。また、回答者の日本語学習歴と日本滞在期間も回答させた。以下は各回答者の日本語学習歴と滞在期間である。

回答者1：日本語学習歴2年，日本滞在4月（おそらく4か月）

回答者2：日本語学習歴2008年7月以降，日本滞在2010年4月以降

回答者3：日本語学習歴2年3月（おそらく3か月），日本滞在3月（おそらく3か月）

回答者4：日本語学習歴1年11月（おそらく1年11か月），日本滞在0年9月（おそらく9か月）

回答者5：日本語学習歴2007年9月以降，日本滞在2010年4月以降

回答者6：日本語学習歴3年，日本滞在8月（おそらく8か月）

回答者7：日本語学習歴3年3月（おそらく3か月），日本滞在3月（おそらく3か月）

回答者8：日本語学習歴，日本滞在期間について回答なし

回答者9：日本語学習歴，日本滞在期間について回答なし

回答者10：日本語学習歴2007年9月以降，日本滞在0年3月（おそらく3か月）

以下、学生の回答を元に考察を試みることにする。

2.1 コンピュータの授業で印象に残っている言葉

前述の通りこの調査では、各回答者の、コンピュータの授業で印象に残った言葉について回答を求めた。以下に、回答のあった語彙を、誤った表記である場合も訂正せず、回答者ごとに列記する。順番は回答者が左横書きで回答を筆記した順序に従っている。

回答者1：「インターネット」「文章入力練習」「ダウンロード」「シャットダウン」（回答語数4）。

回答者2：「IF」「OS」「応用ソフト」「基本ソフト」「ROUND DOWN」「ROUND UP」「INT」「SUM」「売価」「利益率」「評価」「売り上げ」「所得」「商品名」「均等割」「囲み線」「レイアウト」「デザイン」「ホーム」「挿入」「図形」「ファイル」（回答語数22，ただし誤った単語1）。

回答者3：「ボタン」「クリック」「コントロール」「立ち上がってください」「上書き保存」「シャットダウン」（回答語数6，ただし誤った表現1）。

回答者4：「キーボード」「ワールド」「プレビュー」「ページ設定」「ワークシート」「グラフィックユーザート」（回答語数6，ただし誤った単語1）

回答者5：「銘柄」「仕入先」「仕入金額」「販売」「利益率」（回答語数5）

回答者6：「リボン」「コントロール」「ハードウェア」「ソフトウェア」「セル」（回答語数5，ただし誤った単語1）

回答者7～10は回答なし

本研究の前報に当たる「留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その3）」では、「授業の中で指示される作業ごとの語彙の頻度を支配するのはエクセルなどのそれを使えるようになるために授業が行なわれる授業目標ではなくて、実際に何をするかという授業内容であるということを示唆する結果が得られた」¹⁾。このことを厳密に確かめるためには、授業の配付物で使われている語彙の出現頻度や、実際の授業で使われている語彙の出現頻度を、コーパスを作成するなどして明らかにしなければならないであろう。

だが、あくまで一種の搦め手ではあるが、印象に残っている語彙は、授業の中で重きをなした語彙であり、それゆえに印象に残ったと考えることは十分可能である。作業の指示中で重きをなす語彙であるなら、作業の指示中に頻出したであろうことは十分予測できる。これはいまだ客観的な事実を示すものではないが、回答者の主観の中に印象付けられている語彙と、前報で報告した調査で得た示唆との照合を、ここで試みることにしたい。

登場語彙を以下大雑把に分類する。

①作業を指す語彙：「文章入力練習」「ダウンロード」「シャットダウン」「均等割」「挿入」「クリック」「立ち上がってください」「上書き保存」。

②関数の名称：「IF」「ROUND DOWN」「ROUND UP」「INT」「SUM」

③単独では作業そのものを指すわけではないが、同一回答者の挙げた語群として見ると、例えば簿記計算などの1つの作業を連想させるもの：「売価」「利益率」「評価」「売り上げ」「所得」「商品名」「囲み線」「レイアウト」「デザイン」「プレビュー」「ページ設定」「ワークシート」「クラブウェア」「銘柄」「仕入先」「仕入金額」「販売」「利益率」

④その他、OSやハードウェアなどを指す語彙：「インターネット」「応用ソフト」「基本ソフト」「ホーム」「図形」「ファイル」「ボタン」「コントロール」「キーボード」「リボン」「ハードウェア」「ソフトウェア」「セル」「OS」

以上の分類のうち、④の語彙群は前報でコンピュータの授業での「基礎的な学習語彙」と見なしたもの²⁾と重なっている。①②③の語群が作業に関わる語群であると見なすことができる。特に「クリック」「ダウンロード」「上書き保存」「シャットダウン」などはコンピュータの実技であるならば、毎回のように出てくる語である。これらが、強く印象に残っていることには何の不思議もない。

しかし、①②③の語群と④の語群と、それぞれの語数を数えてみると①②③が31、④が14と、確かに①②③の語群のほうが数が多くすべてあわせた語数45の3分の2強を占めているが、④の語群も3分の1弱を占めており、決して圧倒されているわけではない。

ここからは推測になるが、本稿では①②③の語群という形で現された作業に関わる語彙は、作業の手順の説明の中で繰り返し現れるため、印象に残るのであろう。しかし、④の語群はいちいちおさらいされることはなくても、作業手順を理解するうえでの前提となっており、思考の中に登場してくるがゆえに、意識には上ってくると考えられるのではなかろうか。

本稿でもこの点に関しては示唆を得たにとどまる。コーパスを作成するなどの研究に入るなら、本学教員の協力を取り付け、計画的に行なわねばならない。

2.2 理解語彙のパーセンテージに関する所見

また、前述の通りこの調査ではもう1つのこと、すなわち、2007年～2009年の本研究において学生を対象に調査を行なった、授業で実際に登場する語彙と表現、総計433項目について、理解できる語彙および表現をチェックさせた。

集計に際しては、語彙、表現群を、理解できる語彙、表現としてチェックした回答者の人数によって分類し、それぞれの語彙、表現群に含まれる項目を何項目理解できているか回答者ごとに集計し、実数とパーセンテージを出した。次の表はそのチェックの集計結果をまとめたものである。

表 1

(人)	理解できる学生の数 項目数(個)	回答者 1		回答者 2		回答者 3		回答者 4		回答者 5		回答者 6		回答者 7		回答者 8		回答者 9		回答者 10	
		理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)	理解できる項目数(個)	パーセンテージ(%)
10	35	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100	35	100
9	40	36	90	39	98	40	100	38	95	38	95	37	93	29	73	39	98	28	70	36	90
8	51	39	76	40	78	48	94	44	86	42	82	47	92	30	59	39	76	32	63	47	92
7	46	33	72	33	72	42	91	41	89	37	80	41	89	19	41	34	74	7	15	35	76
6	55	32	58	26	47	50	91	40	73	40	73	47	85	8	15	36	65	9	16	42	76
5	46	12	26	12	26	40	87	34	74	28	61	29	63	8	17	29	63	4	9	34	74
4	49	7	14	17	35	26	53	28	57	33	67	25	51	3	6	28	57	4	8	25	51
3	40	4	10	4	10	15	38	24	60	16	40	16	40	0	0	19	48	3	8	19	48
2	28	1	4	0	0	6	21	7	25	10	36	8	29	1	4	11	39	1	4	11	39
1	31	0	0	0	0	0	0	3	10	3	10	3	10	0	0	15	48	0	0	7	23
(パーセンテージ)		199 (46%)		206 48%		302 70%		294 68%		282 65%		288 (67%)		133 31%		285 66%		123 28%		291 67%	

表1.1の最下段は各回答者のチェックした語彙、表現の総計および語彙、表現の総数433項目に対するパーセンテージである。このパーセンテージに応じて回答者を、授業で登場する語彙、表現を50%以上理解できている者と、理解できる語彙、表現が50%未満の者に分類すると、回答者3、回答者4、回答者5、回答者6、回答者8、回答者10が前者であり、回答者1、回答者2、回答者7、回答者9が後者である。

以下、各回答者の語群ごとの理解語彙、表現数の総項目数に対するパーセンテージをグラフ化したものを、回答者ごとに提示する。

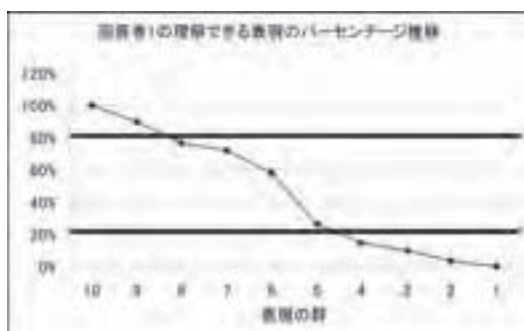


図1.1 回答者1に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

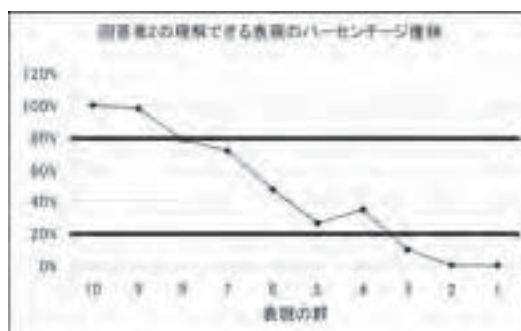


図1.2 回答者2に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

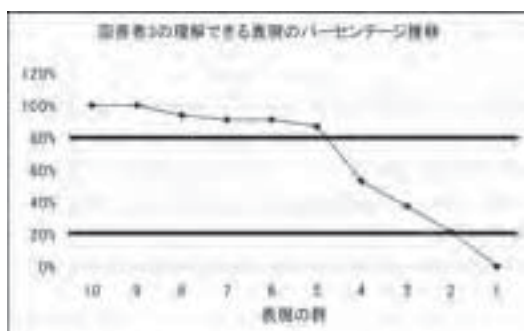


図1.3 回答者3に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

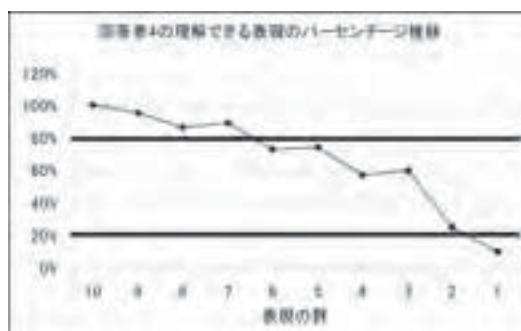


図1.4 回答者4に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

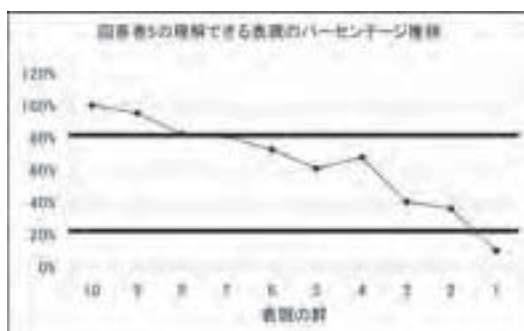


図1.5 回答者5に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

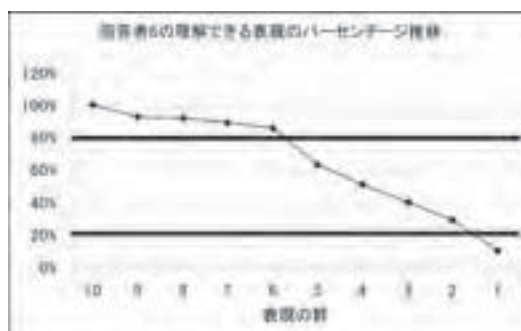


図1.6 回答者6に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

これらのグラフのうち、図1.3、図1.4、図1.5、図1.6、図1.8、図1.10が、50%以上理解できる者のグラフ、図1.1、図1.2、図1.7、図1.9が、理解が50%に及ばない者のグラフである。これらを見比べると、50%以上理解できる者のグラフには、次の2つの特徴のうちいずれかが見られる。左から右に折れ線を辿っていくと、50%以上理解できる者のグラフは、

- ①80～100パーセントの領域に比較的長く留まっている。
- ②0～20パーセントの領域には最後の1項目分しか入り込まない、あるいはまったく入り込まない。

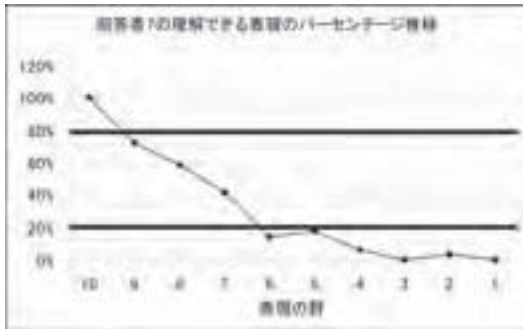


図1.7 回答者7に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

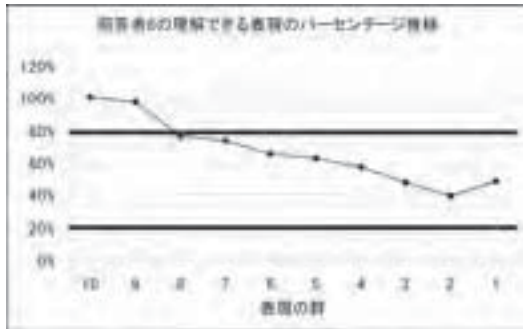


図1.8 回答者8に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

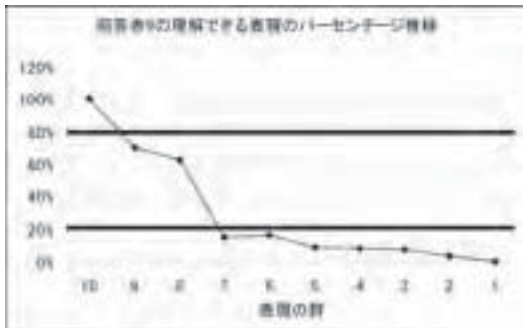


図1.9 回答者9に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

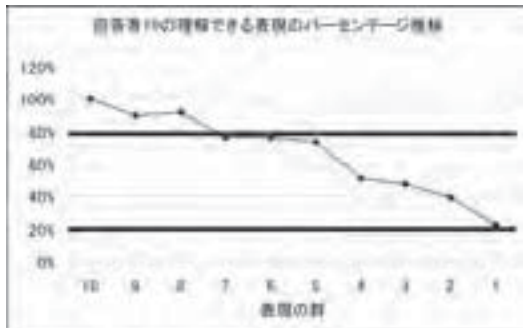


図1.10 回答者10に見られる理解可能表現のパーセンテージの推移

それに対し、理解が50%に及ばない者のグラフには、左から右に折れ線を辿っていくと、次の特徴が両方とも見られる。

- ①80～100パーセントの領域に比較的短い間しか留まっていない。
- ②0～20パーセントの領域に入ってからが比較的長い。

さらに全体的な印象として、理解が50%に及ばない者のグラフは落ち込みが急であると思われるので、Excelの機能を用い多項式近似曲線を引いたところ、理解できる語彙、表現が46%、48%の回答者1、2ではほぼ直線、理解できる語彙、表現が31%、28%の回答者7、9では下に凸の曲線となったのに対し、理解できる語彙、表現が50%以上の者のグラフは、回答者3、4、5で上に凸、10がほぼ直線でわずかに上に凸であった。回答者8だけは例外で、2人理解できた語彙、表現を11項目しか理解しなかったのに対して、1人しか理解できなかった語彙、表現を15項目理解しているため、グラフの右端で右肩上がりになっており、そのために多項式近似曲線は下に凸である。最後の1人しか理解できなかった語彙、表現の部分を誤差としてグラフから除いた上で多項式近似曲線を引くと、それでもわずかに下に凸であるようだがほぼ直線で、傾きは回答者1、2のものに比べて緩やかである。

母数が少ないため、ここから一般的傾向を引き出すことはできない。しかし、わずかな例にあっても、一定の傾向が反映されていると考えることもできる。ゆえに、これもまた前節と同じく

示唆に留まるものであるが、以下のように言うことができよう。すなわち、これらのグラフが示すのは、語彙、表現の理解が比較的貧しい学生は、多くの学生が知っている語彙、表現に関しても、理解が比較的豊かな学生に比して理解力の相対的な弱さがすでに見出されるということ、そして、知っている学生が少ない語彙、表現以前の段階でも、分からない語彙、表現が多く見られるようになってくるということである。

3. 学生参加型教材開発の試み（続報）

前報³⁾において本学に在籍する留学生のレベルとニーズに合わせた日本語学習用教材開発の一つとして、学生参加型の教材開発を開始したことを報告した。内容は本学を卒業して企業で仕事をする、あるいは大学院で研究するに必要な漢字の読みを効率的に身につけるための練習帳を作ることにある。また、中国語を学習する日本人学生のためには、日中共通に存在する語彙の中国語の発音を学習することにより効率よく中国語の語彙を増やすことにも役立つように工夫してある。

具体的には、常用漢字1945文字（2009年末時点）について、それぞれの漢字を含む熟語が中国語にも日本語にも存在し、その意味や使われ方も似ていて、発音だけ異なるような語彙を探し出し、中国語の発音と日本語の読みを併記し、併せてその漢字の訓読みも表記することにより日本語及び中国語の学習を効率的に進めることを主たる目的とした。それに加えて、取り上げた語彙を用いた短い例文を作成し、さらにその中国語訳を付して、日本語、中国語学習者のための練習帳とすることを目指した。

昨年からはじめたこの作業は2010年7月までに漢字1800文字についてその漢字を用いた用語の選択を終わり、その中の漢字900字分については選択された用語を用いた例文作りが終了し、2010年12月にはその例文の中国語訳も終了した。

ところが、2010年になって、常用漢字が196字追加され、現在の常用漢字から使用頻度の極めて低い5文字が削除されることになった。さらに人名漢字284字の存在を考えると、旧常用漢字1945字をゴールとするのはもはや意味がなくなってしまった。さらに、日本語能力試験N1レベルでは出題範囲として、常用漢字に含まれないいわゆる表外字が約100字含まれていることもあり、文字の選びなおしが必要となった。そこで、2010年に追加された新常用漢字のすべてを追加し、さらに人名漢字などの中から重要と考えられる漢字を選択し、2300～2400字を目安として再選定することにし、その作業を開始した。

この教材作成の作業チームは、前報1)で報告した聖泉大学日本語教育研究会⁴⁾（2009年5月に発足）の教科書作成分科会として作業を進めているが、現在の進捗状況から推算して、2011年度末を目標に教材完成を目指すこととして作業を進めている。作業の分担は文字と語彙の選定は教員が、例文作りは日本人学生および留学生の合同チームで、例文の中国語訳は中国人留学生が担当して進めており、教材が完成したら「学生が作った学生のための日本語・中国語練習帳」としたいと考えている。

4. 最後に

以上が、本学留学生の実情に応じた日本語教材について第4回の報告である。2.1では学生の協力を得て、学生が日本語「で」授業を受けている時に、頭の中で起きていることをより正確に想像する材料を得た。これはいまだ示唆に留まるものであるが、日本語教育実践の中で実感されるところとすり合わせて、教育に活用したいと考える。また、2.2は学習者を語彙、表現の理解度の違いが、語彙、表現のバランスの違いと対応しているということを示唆するものであり、日本語学習者の類型化に資するものがあるのではないかと考えることもできよう。本研究は留学生のレベルとニーズに合わせた教材開発のためのものであり、2.2は留学生のレベルに関する節、2.1は、留学生が授業で必要とする語彙は一体どのような種類のものであり、何を決定要因とするのか、に関わるものであるので、ニーズに関する節であった。3. は、ニーズとレベルの当事者である学生自身が作成している教材に関する報告である。

今回は言葉をめぐる現象そのものについての報告が中心となった。それゆえ、調査結果、結果に関する考察は、さらに多面的な解釈や活用が考えられよう。と同時に、本研究が未だ未熟なものであることを認めねばならず、そして、客観的な調査結果を厳密な方法で得るよりも、本研究に従事している者たちが、自ら日本語を教える現場で経験することと照会することで実感を強めていくという、主観的な方法を脱却し得ないことも認めねばならない。しかし、ここで得た示唆が、たとえ方向しか示さないものであるにせよ、100年後の日本語教育の成熟に対して一滴でも資するところがあれば、望外の喜びである。

参考文献

1. 田中, 山口, 那須「留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発」(『聖泉論叢』15号(2007)所収)
2. 田中, 山口, 那須「留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発(その2)」(『聖泉論叢』16号(2008)所収)
3. 田中, 山口, 那須「留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発(その3)」(『聖泉論叢』17号(2009)所収)

註

- 1) 田中, 山口, 那須「留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発(その3)」(『聖泉論叢』17号(2009)所収) p.100。
- 2) 当該の語群は以下の通りである。「コンピュータ」「ハード」「ソフト」「基本ソフト」「応用ソフト」「OS」「パソコン」「ハードウェア」「ソフトウェア」「キーボード」「マウス」「メモリ」「ハードディスク」「CPU」「ディスプレイ」「プリンタ」(田中, 山口, 那須前掲論文 p.99参照)
- 3) 田中, 山口, 那須前掲論文。
- 4) <http://www.seisen.ac.jp/career/index.html> (2010年12月29日)

資料1

調査紙の第1ページおよび第2ページ

日本語学習歴（ 年 月以降） 日本滞在（ 年 月以降）
コンピュータの授業で印象に残っている言葉があったら書いてください。

次の語彙・表現のうち意味が分かるものをチェックしてください。

- フォルダ
- ファイル
- 入力
- スラッシュ
- D14（ディーのじゅうよん）をクリック（表計算，応用統計学などで）
- ツールバー
- パーセントスタイル
- F4（エフよん）キーを押すと番地が固定
- ウィンドウ
- ダブルクリック
- 関数（例： Countif 関数（カウントイフかんすう））
- 関数を呼び出す
- ウィンドウを閉じる
- ヘッダ
- フッタ
- オブジェクト
- 串刺し
- 構成比
- 各種集計
- ダウンロード
- オート SUM（サム）
- 範囲を選ぶ
- 見出しを固定する
- タイトル行
- コンピュータ
- ハード
- ソフト
- 基本ソフト
- 応用ソフト
- OS
- パソコン
- ハードウェア
- ソフトウェア
- キーボード